抄に、下野或は信濃也と有るは、ひが事といへども、夫木抄に信濃なるとよめれば、それをよしとせんか、契冲が名所補翼抄にも信濃と出せり、

〔松屋筆記八十八〕なすの湯

拾遺集九卷雜下大中臣能宣が長歌に、をほがまの、うらさびしげに、なぞもかく、世をしもおもひ、なすの湯の、たぎるゆゑをも、かまへつゝ、わが身を人の、身になして、思ひくらべよ云々、能宣家集には、たぎるゆゑをも、かまへつゝ、を、たぎる胸をも、さましつゝに作れり、世をわびしきものに思ひなすに、那須の湯をよせたり、那須は、下野國那須郡にて、今も高名の温泉あり、平治物語三卷頼朝擧義兵條に、九郎御曹司云々、信夫に越給へば、佐藤三郎は公私取認テ參ラントテ留リ、弟四郎ハ卽チ御供ス早白河ノ關固テケレバ、那須湯詣ノ料トテ通リ給フ云々、參考京師本に、白河ノ關固テケレバ、那須湯ト云山路ニカヽリテ通リ給フ云々なども見ゆ、さるを夫木抄廿六卷雜八温泉部に、題不知、

なすの湯信濃　よみ人をらず、

をなのなるなすのみゆをもあむさばや人をはぐゝみやまひやむべく、とあるより、物に信濃の名所とせるおほかり、和歌名所追考百四卷下野部に此歌を擧て、初句下野やに作り、異本信濃なるとあり、げに信濃なるは、聞誤にて、下野やの方を正しとすべし、たぎるゆゑをもかまへつゝは、たぎり湧湯坐を構るよしに、故といふ詞をよせたるたるなり、

〔夫木和歌抄二十六温泉〕題不知懷中なすの湯信濃　よみびと をらず

をなのなるなすのみゆをもあむさばや人をはぐゝみやまひやむべく

〔東遊雜記一〕殺生石のある地より七八丁下に温泉あり、湯本と稱し、家二十四軒あり、夏月の間は入湯の人もあるよし、冬月には雪ふかき所ゆへに、入湯する人もなし、此湯至て熱湯にて、此邊硫黄の氣強く、何地獄かの地ごくと稱して、湯の沸上る所多く、さゐの河原といふ所もあり、